

水俣病と市民

熊本大学助教授(社会学) 越井郁朗

水俣市の表を関国鉄水俣駅はチツソ水俣工場の正面に向いて建てられている。このチツソの君臨する水俣市で新日本窒素(現チツソ)水俣工場の排水によって、世界史上初の有機水銀中毒事件、そして戦後最大の産業公害が発生した。

ちて与えられたものはチツソからわかつてある。被害者と被害者の交渉は、一方が圧倒的に被害者であり他方が被害者であれば、被害者側にも潜在的な被害者である地城住民と世論の強い支持がない限り、対等の立場に立つて補償交渉することはきわめて困難である。チツソの町である水俣では漁民や患者がチツソにたつた最初の人であり、市民たちは「中立的」立ち場を守った。被害者は最初から地城社会の支持もなく孤立

水俣病患者第一号が誕生したのは昭和二十八年で、それから三十五年にかけて、水俣市を中心に北は豊北郡田浦町から南は鹿児島県出水市にいたる不知火海沿岸の漁民とその家族の間から百十一人の患者を出し、死者四十二人を数え、今も後遺症に苦しむ生存者は六十九人のほつている。このうち母の胎内ですでに有機水銀に留され、生まれるがらに水俣病の實め苦を負わされている胎児性患者は二十二人(死に二八)に達している。患者は有機水銀によって

過去の悪夢は思い出したくないという町の空気の中で、水俣病患者は住民からの強いさへもなく孤立して暗い生活を送っていた。患者が生命と健康を守るという正当な権利の主張もできず、肉体はかりか精神までも病んでいる暗うつな姿は一層痛ましい。水俣病の悲惨さは今も続いているし、現に新潟の第一水俣病を生んでいる。第三、第四の水俣病が発生しないという保障はどこにもない。この高価な恐ろしい経験を通去のものとして忘れてはいけなしい、してはならない。

公害の被害はいつも最も弱い層に最も強く現れる。数百億円におよぶ膨大な設備投資をもつ本工場と、その日暮しの貧しい漁民と水俣病患者との対決の結果は明らかである。被害者と被害者の交渉は、一方が圧倒的に被害者であり他方が被害者であれば、被害者側にも潜在的な被害者である地城住民と世論の強い支持がない限り、対等の立場に立つて補償交渉することはきわめて困難である。チツソの町である水俣では漁民や患者がチツソにたつた最初の人であり、市民たちは「中立的」立ち場を守った。被害者は最初から地城社会の支持もなく孤立

三十四年孤立無援の漁民や患者たちはチツソ工場にデモを行ない工跡に乱入し、あるいはすわり込みを行なつて補償要求をした。それは八方出口のない抑圧された封建社会の百姓たちの一揆(き)や打ちこわしを思わせる。被害者側の行動に対して官僚の介入が行なわれ、その年の暮れ近く水俣市長ら九人のあつせん委員や、県知事、市技五人の水俣病紛争調停委員の努力によって、チツソ工場側と水俣漁民、県漁連や水俣病患者互助会との交渉も「円満無事」に解決した。それ以後も、患者互助会はチツソ側と新田見舞い金の値上げについて交渉している。それは会社側の提言が盲順しているように友好的な雰囲気の中で行なわれたものだが、互助会側がひたすら低姿勢で会社側の意向に期待するものであった。最近新潟の患者が訴訟に踏み切つたのに刺激されて、水俣の互助会内部でも訴訟しようという声がかなり強まったけれども、患者たちの心の中には、絶えず、訴訟すればチツソが見舞い金支払いを打ち切るかもしれないという恐れがあり、この話はさたやみになつてしまった。ここには封建地主と家臣との関係、恩賜と家臣の関係を思わせるものが残つているように思われる。

弱い被害者たちは、地城社会の住民の強力な支持なくして巨大な資本と対等に交渉することは不可能である。この一月、新潟県の患者の来船に刺激されて水俣病対策に同僚を注いでいる「中立」

このよつな会社二辺側の町のふいめ閑家の中で、初めて会社に対して存在として現れた患者互助会の困難な立ち場は明らかである。補償を要求する患者や漁民に対して、当時の水俣工場の労働組合は会社の側に立ち、患者互助会とは冷たい関係にあった。この町の住民の行動原理は、会社に悪く思われないうちに振る舞うことである。その範囲内では水俣病患者に同情を注いでいる「中立」

等市民会議が生まれるまで被害者を応援する地城社会の組織のなかったことが、患者たちを孤立させたばかりでなく、その生活を切心同面にわたつて暗くみじめにしていったのだといえよう。そのことは新潟と違って、水俣はチツソを中核とする町であるという事情が大きく作用している。



著者

責任は重大 補償の義務果せ

三十四年孤立無援の漁民や患者たちはチツソ工場にデモを行ない工跡に乱入し、あるいはすわり込みを行なつて補償要求をした。それは八方出口のない抑圧された封建社会の百姓たちの一揆(き)や打ちこわしを思わせる。被害者側の行動に対して官僚の介入が行なわれ、その年の暮れ近く水俣市長ら九人のあつせん委員や、県知事、市技五人の水俣病紛争調停委員の努力によって、チツソ工場側と水俣漁民、県漁連や水俣病患者互助会との交渉も「円満無事」に解決した。それ以後も、患者互助会はチツソ側と新田見舞い金の値上げについて交渉している。それは会社側の提言が盲順しているように友好的な雰囲気の中で行なわれたものだが、互助会側がひたすら低姿勢で会社側の意向に期待するものであった。最近新潟の患者が訴訟に踏み切つたのに刺激されて、水俣の互助会内部でも訴訟しようという声がかなり強まったけれども、患者たちの心の中には、絶えず、訴訟すればチツソが見舞い金支払いを打ち切るかもしれないという恐れがあり、この話はさたやみになつてしまった。ここには封建地主と家臣との関係、恩賜と家臣の関係を思わせるものが残つているように思われる。

弱い被害者たちは、地城社会の住民の強力な支持なくして巨大な資本と対等に交渉することは不可能である。この一月、新潟県の患者の来船に刺激されて水俣病対策に同僚を注いでいる「中立」

等市民会議が生まれるまで被害者を応援する地城社会の組織のなかったことが、患者たちを孤立させたばかりでなく、その生活を切心同面にわたつて暗くみじめにしていったのだといえよう。そのことは新潟と違って、水俣はチツソを中核とする町であるという事情が大きく作用している。

市の財政経済上に占めるチツソの比重は高く、近年までチツソの納める市税は市税総額の約五〇割に達しており、またチツソ工場の生活協同組合である水光社は、市の総買力の五〇割を占めている。「水俣に生まれ水俣と不関不離の関係の中に育つて来た目撃者は町との関係も一般工業都市に見られぬ血のつながりにも似た交情を深め、歩みをともして来たものである」と水俣市史(昭和四十二年発行)が述べているように、水俣はチツソの支配する町であり、チツソとは工場側から養子孫の深い関係にある。水俣に生まれながら、わかれの工場という密接な関係が市民の意識を支配している。

「的」立ち場を囁る婦人会は水俣病患者が発生した当時、氣の毒な患者家庭を自発的に慰問したが、工場排水が疑われ会社と患者たちとの対立が先鋭化した結果、一方に加担する者とみなされるのを心配して慰問を中止して今日に至っている。

住民は「中立的」で患者に遠くから同情は惜しまないが、市の基礎だと信じているチツソが水俣病の加害者であると断定されること

によって、会社の経営が苦しくなることを、当のチツソ経営者自身よりも案じているように思われる。最近世間でチツソ側の公害に対する処置を非難する声が高まりつつあることに住民はきわめて神経質に警戒している。奇妙なことに、政府の公害認定を機会にチツソが水俣を撤退したり、あるいは

事業規模を縮小するのではないかという声が、最初に出てきたのは市民たちの間からであった。彼らはチツソが地元でこのまま事業を続けてくれることのみひたすら希求し、患者に対しては同情的に生活補償をいくらか増額してくれることを懇願している。市の商工会もまた三十七年の安定賃金闘争を機に生まれた新労側も、同じ内容の陳情を会社側に繰り返している。

水俣病患者の暗いみじめさは、単なる同情では救えない。公害の最も有力な防止力は住民の永続的な監視と、地域住民の被害者に対する強い連帯意識である。それは幸いに発病しなくても、自分たちも潜在的には同じ被害者であることを自覚することから生まれよう。この意味で、水俣病対策市民

の側社

弱者の立場

めて多難であり多くの障害が横たわっているといえよう。

と励ましであり、地域社会との連帯感ではなからうか。

最近、チツソ旧労や地区労が市民会議への参加を決議した結果、市民会議は多くの市民からいわれのない誤解をうけ色メガネで見られている。新労は旧労への反感から、市民会議の存在を無視して、水俣病患者への支援センター構想を発表して、市民に呼びかけたり市当局に働きかけている。しかし、その支援センターなるものの構想はばく然としており、新労の沢田組合長の説明によれば、それは「銀行などを窓口とする患者へのカンパ」を集める組織であるらしい。地域社会から孤立しチツソへの遠慮から、もの言わぬ患者が病んでいるのは肉体だけではない。被害者の救済に力があるのは、物心両面にわたる暖かい支援

チツソが水俣という地域社会に占める比重が高いほど、公害を生させ、患者をこゝまで追い込んだ企業の責任はより重大である。チツソは一刻も早く公害の非を認めて患者への補償の義務を果たすべきである。それがチツソが地域社会に受け入れられ、信頼される最良の道である。近年の企業は企業イメージを尊重しそれが企業の発展を大きく規定している。企業イメージを高める上からもそうすべきである。これまでのように会社が大きく上から君臨するのではなく、市民と対等の立ち場で地域社会の発展に寄与すべきである。そこから新しい企業と地域住民との調和も生まれてくるのである。